

森三千代の仏印訪問と南洋文学

趙 怡*

[論文要旨]

小説家森三千代（1901-1977）は、太平洋戦争勃発直後の1942年1月に、「対仏印日本婦人文化使節」として外務省からフランス領インドシナへ派遣された。旅の成果は同年に出版された紀行文集『晴れ渡る仏印』、フランス語の紀行詩集*Poésies indochinoises*（インドシナ詩集）、『金色の伝説』（安南伝説集）および二年後の『龍になった鯉』（安南童話）などがある。

森三千代が南洋と関わり始めたのは、1928年から夫で詩人の金子光晴（1895-1975）と一緒に上海、東南アジア、パリなどに4年かけて「放浪の旅」を敢行した時だった。型破りの夫婦が独特な海外体験を糧に多くの異郷文学を生み出し、しかもそれが東洋・南洋・西洋を跨いでいる事例は、世界文学史においても類を見ないだろう。しかし、金子光晴が従来高く評価されてきたのに対して、森三千代は長年埋もれており、今はむしろ光晴の妻としてしか知られていない。

森三千代の異郷文学は極めて多彩であり、異国の地で暮らす日本人女性の奮闘と悲哀が、実にリアルかつ繊細に描かれており、生き生きとした異国の人々も数多く登場している。南洋文学に限っても、上記の紀行詩文や童話民話のほか、多くの小説も創作している。南洋の自然と人々を単にエキゾチックな風物として眺め、植民地支配に加担しているような作品が多産された時代に、森三千代の南洋文学は異彩を放っている。にもかかわらず、その作品はほんの一部しか言及されたことがなく、多くはその存在すら知られていない。

筆者は金子夫婦の海外体験と異郷文学に関心を持ち、関係者の協力も得て長年研究調査を進めてきた。本論では森三千代の未発表日記を含む多くの一次資料によって、まず不明な点が多かった森三千代の仏印訪問の実態を検証する。そのうえ、金子光晴を含む日本の南洋文学と比較しながら、彼女の多彩な作品を解読し、その特徴を具体的に分析してみたい。

[キーワード]

南洋文学、森三千代、仏印訪問、関連作品、金子光晴

*東京工業大学 非常勤講師／第6回公募研究プロジェクト採択